学力問題からみる社会的排除の構造

―塾調査の分析における子どもたちのメンタリティに注目して―

原　　清　治

〔抄　録〕

学力低下をめぐる問題のなかで，子どもたちの学力は一様に落ちたのではなく，階層格差をともなって，文化的・社会的教育環境の劣った子どもに大幅な学力低下がみられたことは，これまでの学力をめぐる先行研究によって明らかとなっている。また，学力の二極化は通塾の有無との相関が高いことも指摘されてきている。通塾者のなかにもさらなる二極化が進行していることは「学力問題からみた塾とその機能に関する実証的研究」（『佛教大学教育学部学会紀要第５号』，2006）において実証してきたが，同様の構造が非通塾者においてもみられるのではないだろうか，をリサーチ・クエスチョンとしてさらなる塾調査の分析を進めた。結果的には，仮説が支持されたが，その背景には子どもたちが学力階層をかなりの程度お互いに内面化しており，学力下位層では厭世的ともいうべき自己否定的な価値意識が形成され易いことが明らかとなった。

ポール・ウィリス（1977）は，労働者階級の子どもたちが自らを「野郎ども（lads）」と称して進んで屈強な肉体をもつ仲間集団を形成し，一方で，学校文化に親和性の強い富裕層の子どもたちを「耳穴っ子（ear'olds）」と呼んで軽蔑や嘲笑の対象にしていたことを指摘した。こうした知見にもあるように，子どもたちのメンタリティに注目した場合，学力の二極化によって，できる子とできない子との間に「おれたち（we）」と「やつら（they）」の関係が形成されるだけでなく，その乖離がそれぞれの学力カテゴリーの内部においてもみられることが明らかとなったのである。とりわけ学力最下層の子どもたちの自己否定的な価値意識は，イギリスやアメリカで問題となっている社会的に排除されやすい「働く貧困層」のもつ価値意識との共通点が多く，二極化の学力モデルのさらなる進行や就労形態の変化に伴い，今後の日本社会においてもますますこうした現象が起こることが想起されるのである。

キーワード　通塾による学力格差，子どもたちのさらなる二極化，働く貧困層，自己否定的な価値意識，ユースフォビア

Ⅰ．教育における格差の問題

2000年頃を境に世間をにぎわす，いわゆる「勝ち組」と「負け組」の用語に代表される格差の問題は，教育の世界にも影響を落としはじめている。規制緩和による教育の市場化，能力別学級編成の進展などはその最たる例である。苅谷剛彦ら（2002）は，子どもたちの学力低下を分析するなかで，塾に通っているかどうかによって学力低下に差がみられることを明らかにした（図１参照）。

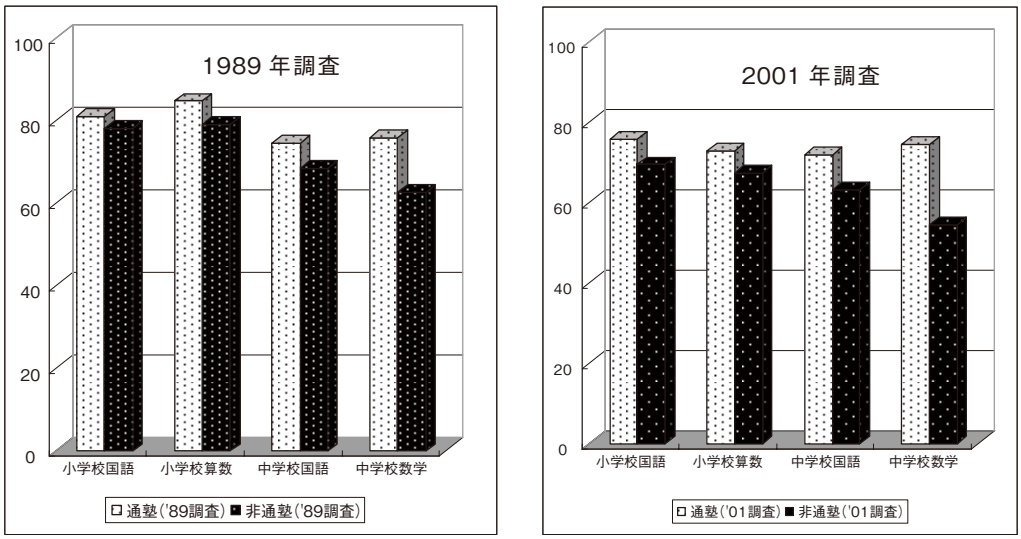

図１　「通塾」「非通塾」別の平均得点の比較

（資料）苅谷剛彦他『調査報告「学力低下」の実態（岩波ブックレット No.578)』岩波書店，2002，p.18より作成

これをみると，1989年調査では通塾による学力差はそれほどみられなかったが，2001年調査では全体的に平均点がさがっていること，そして小学校算数を除くすべての教科で塾に通っている子どもと通っていない子どもの差が拡大していることがわかる。同様に，中学校数学の正答数を従属変数とした重回帰分析をおこなった結果，正答数にもっとも大きな影響を与えるのは通塾しているか否かであったという結果も出ている。（表１参照）。

このように，塾に通っているかどうかは，現代の子どもたちにとって学力形成のための必要不可欠な条件であることがうかがえる。学力低下論争においても格差の問題が問われる契機になったのが，苅谷らを代表とするこうした一連の研究である。

教育の世界で格差がひろがってきた影響は，子どもたちにメンタリティの変化をもたらしているのではないだろうか。学校に親和性をもつ裕福な子弟層と，彼らに反発する労働者階級の子弟層を分析した先行研究に，ポール・ウィリス（1977）の『ハマータウンの野郎ども（*LEARNING TO LABOUR*)』がある。労働者階級の子弟である「野郎ども（lads)」は精神労働よりも肉体労働を志向し，自分たちの反権威的な「対抗文化」を，自分の環境（工場，学

表１　中学校数学正答率の変化

	1989年			2001年		
	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	非標準化係数	標準誤差	標準化係数
定数	44.436	2.004	***	42.326	2.616	***
男子	0.656	0.867	0.015	－1.619	1.309	－0.033
読み聞かせ	2.785	0.944	0.06**	3.317	1.414	0.063*
通塾	11.614	0.992	0.269***	16.619	1.638	0.338***
宿題	6.591	0.723	0.199***	6.295	0.921	0.194***
勉強時間	0.064	0.012	0.127***	0.007	0.019	0.011
全く勉強しない	－0.092	1.518	－0.002	－5.785	2.077	－0.101**

＊ 従属変数：89年数学スコア，N=2089，F=71.134，Signf=0.000，Adj R^2＝0.168
＊ 従属変数：01年数学スコア，N=1133，F=51.249，Signf=0.000，Adj R^2＝0.210
（＊＊＊ p＜0.01，＊＊ p＜0.05，＊ p＜0.1）
（資料）苅谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店　2004　p.147

校）から経験的に掴み取っているため，伝統的な「男らしさ」という価値観を重視する。一方で，その価値観になじまない，机にかじりつく「耳穴っ子（ear'oles)」を男らしくないと軽蔑し，敵視している[(1)]。「野郎ども」は自分たちの仲間を「おれたち（we)」と呼び，「耳穴っ子」は「やつら（they)」と呼ぶ。こうしたウィリスの研究でみられる「おれたち」と「やつら」といった意識の住み分けが、通塾・非通塾の子どもたちにもみられるのではないだろうか。

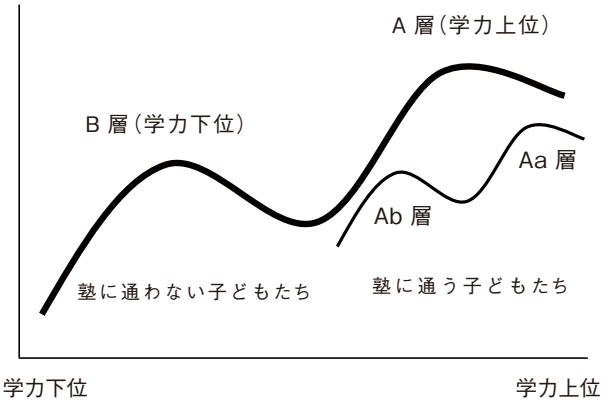

図２　子どもたちの学力分布における二極化傾向のモデル

（資料）原清治・山崎瞳「学力問題からみた塾とその機能に関する研究」『佛教大学教育学部学会紀要第５号』2006，p.16

佛教大学教育学部学会紀要第５号（2006）では，塾に通う子どもたちのなかに「進学エリート」とよばれる学力上位の上位層と，「偽装エリート」とよばれる学力上位の下位層ができており，「偽装エリート」は塾に通わない子どもたちと区別されたいために不本意ながらも塾に通っていることを明らかにした。（図２参照）

そこには，ウィリスが指摘するおれたちとやつらといった意識の住み分けが，塾に通う子どもと塾に通わない子どものなかにみられた。本論では，それをさらに進め，「塾に通っている

子どもたちの内部や，塾に通っていない子どもの内部においても，we と they の乖離がみられるのではないか」を仮説とし，子どもたちのメンタリティに注目して通塾による帰属集団の意識の違いを明らかにすることを目的とする。そして，子どもたちが帰属集団を規定するプロセスを詳細に検討することで，学力を起点とした社会的排除の構造を明らかにしていきたい。

Ⅱ．子どもたちはどのようにして意識の住み分けをおこなうのか

それでは，塾に通う子どもと塾に通わない子どもにはどのような帰属集団に対する意識の差異がみられるのだろうか。本研究では，インタビュー調査を中心この問題へ接近してみたい。調査の概要は，以下の通りである。

【調査対象】2006年４月～７月

【調査対象】塾に通う中学生42名と塾に通わない中学生39名

表２　サンプルの属性

	通塾	非通塾
男子	23	17
女子	19	21

【調査方法】個別による面接法

１）塾に通う子どもたちに対するインタビュー

本研究の前段に位置付く調査研究（原他：2006）では，塾に通う子どもたちのなかに、「進学エリート」と呼ばれる子どもたちと，「偽装エリート」と呼ばれる子どもたちとが存在することを明らかにした[(2)]。両者を分岐するのは学力や学習意欲の高低であり，進学エリートは学力や学習意欲が高く，反対に偽装エリートはそれよりも学力や学習意欲が劣る。今回の調査では，同一の塾に通う中学２年生のうち，学力最上位クラスの「特進クラス」に通う子どもたちと，学力最下位クラスの「標準クラス」に通う子どもたちを対象にインタビューを実施した。内訳は以下の通りである。（表３参照）

表３　通塾者インタビューの内訳

	特進クラス	標準クラス
男子	15	8
女子	7	12

ここでは，特進クラスを「進学エリート」，標準クラスを「偽装エリート」として，両者がお互いをどのように考えているかを中心にインタビューの分析を進めてみたい。

Q：あなたはＢクラス（標準クラス）に通っている子どもたちをどう思いますか。

A：同じ塾に通ってるけど，なんであんなにできへんのかわからん。たまに同じ授業を受けたりすることがあるけど，先生の教え方が悪いとかそんなこともないのに、なんでそんなに点が取れへんのやろう，要領悪いなあ①，と思う。

B：夏休みとか，定期テストの前には一緒に授業を受けるときがあったけど，授業の進みがおそくなったり，「そんなんわかってるわ」って思うようなことを繰り返して演習問題したりしてたから，はっきりいって迷惑やった②。定期テストはどうしても学校別でわけなしゃーないんかもしれんけど，あれやったらいつものクラスで大まかにあってるところをやってくれたほうがよっぽどええ。

C：そんなこと考えたことがないなあ。学校とか一緒でもあんまりしゃべったことないやつが多いし，塾で同じクラスの子と遊ぶことが多いからあんまり関わらへん③からよう知らんし。同じ塾におるってだけやな。

D：たまに近所のおばちゃんとかから，「あの○○くん（標準クラスの生徒）はあんたと同じ塾やのにえらい出来がちゃうわー」とか言われることがあって「うちとアイツ④はクラスがちゃうんやから一緒にせんといてーな，むかつく⑤」って思った。近所の人らはうちの塾ってだけでひとくくりや。中は全然レベルがちゃうのに，もっとちゃんとみてほしいわ。

下線部①のように，進学エリートの子どもが偽装エリートに対してもつ視線は，同じ塾に通う子どもであるにもかかわらず，自分たちとは違うといった意識があることがうかがえる。同様の考えは下線部③のように，たとえ学校が同じであっても，自分たちの仲間グループではなく，したがってあまり彼らとは関わらないといった態度からも見て取れる。そして，下線部②や⑤のように，偽装エリートの子どもたちと一緒にされることは迷惑だ，という態度をはっきりと表す子どもも少なくなかった。それは，下線部④の「うちとアイツ」という言葉もみられる。進学エリートの子どもたちは，偽装エリートの子どもたちと一緒に授業を受けることで，自分たちの授業に支障をきたしたり，学習予定の範囲が狂わされることを極端に嫌う。このように，学力や進学意識が低い偽装エリートの子どもたちに対して，進学エリートの子どもたちは「一緒にされたくない，迷惑だ」といった認識をもっていることは明らかである。進学エリートの子どもたちは，自分と同じ進学エリートの子どもを we，偽装エリートの子どもたちを they と考えているのである。ウィリスは階級社会のなかにおける労働者階級の子弟が「おれたち」であり，裕福層を「やつら」と解釈したが，ここでは通塾している子どもたちという同種のなかにも，「おれたち」と「やつら」という峻別がおこっていることがわかる。それでは，偽装エリートの子どもたちからみて，進学エリートの子どもはどのようにみえるのだろうか。

Q：あなたはＡクラス（特進クラス）に通っている子どもたちをどう思いますか。

E：俺はあいつら⑥みたいにめっちゃ勉強できるわけじゃないから。とりあえず今のレベルから落ちへんようにするだけで精一杯や。学校の授業以上の勉強なんかしたくもない。何考えてんのかわからん。

F：うちらはあの子らみたい⑦に勉強できへんもん。１回聞いただけで覚えられるわけない。親には「同じ塾行ってるんやから○○ちゃん（特進クラス）みたいにがんばれ」とか言われるけど，頭の作りがちゃう⑧んやから，ムチャ言わんといてほしいわ。

G：そりゃできればあれくらい頭がよかったらええなあ⑨，とは思うけど，俺らはほどほどの頭しかないからああなるんは難しいわ。

偽装エリートの子どもたちのインタビューは以下のようにまとめられる。それは下線部⑥や⑦のように自分たちと進学エリートを「俺とあいつ」，「うちとあの子」のようにweとtheyに分けている点である。これは進学エリートが偽造エリートをweとtheyで区別している視線と同じである。そのうえで，進学エリートと自分たちとを区別するキーワードとして，子どもたちの口から発せられるのは，下線部⑧や⑨などの「頭の出来が違う」という言葉である。1980年代中ごろからすすめられた「ゆとり教育」に代表される教育改革の目的は「誰でも一生懸命がんばれば100点をとることができる」ことであった。そのために，学習内容は３割削減され，それまでの教育水準を下げることになっても，すべての子どもたちに勉強ができるおもしろさや楽しさを実感させることをねらいとしていた。しかし，偽装エリートの子どもたちが発する「頭の出来が違う」という言葉は「一生懸命がんばっても100点が取れるとは限らない」ということを示唆している。塾に通う子どもたちは，勉強のできる・できないは，個人の努力だけではどうにもならない要素を含むことを理解しているのである。

以上のように，塾に通う子どもたちのなかにも，進学エリートと偽装エリートとの間で「おれとやつら」「うちとあの子」のような意識の乖離が見られた。たとえ同じ塾に通っていても，自分が進学クラスか標準クラスかによって，子どもたちの帰属意識に変化がみられるのである。いいかえれば，進学エリートの子どもたちは偽装エリートを「あいつら」とみなし，同様に偽装エリートは進学エリートを「頭のつくりが違うやつら」とみているため，同じ塾に通っていても，「自分たちと同じ仲間だ」といった意識がみられないのである。

２）塾に通っていない子どもたちに対するインタビュー

次に，塾に通っていない子どもたちを対象にインタビューを試みた。ここでは，塾に通わない中学２・３生のうち，主要五教科の定期テストの平均点数が10点以上の子どもたちと，10点未満の子どもたちの２グループに分類した（表４参照）。

表４　非通塾者インタビューの内訳

	標準学力層	学力未定着層
男子	11	6
女子	9	12

ここでは，前者を「標準学力層」，後者を「学力未定着層」とし，彼らがお互いにどのように考えているのかを分析していく。

Ｑ：あなたは学力未定着層の子どもたちをどう思いますか。

Ｈ：あいつらがおるおかげで，俺の頭の悪さが目立たへんから助かる⑩。だって，あいつら数学とか１ケタやし。あっこまで頭悪かったら大変やろうな，とは思うけど。

Ｉ：自分がどこまでテストが悪くてもいいか，っていう基準かな。とりあえずあそこまでテストが悪くなったら，勉強しよう⑪って感じ。あんなにでけへんかったら，高校行かれへん。親も「まあ，今の成績やったら高校行けそうやから，別に今勉強せんでもいいんちゃうか」って言ってくれるから。

Ｊ：あいつらはやばい。ほんまに小学校くらいの漢字とか計算があやしいもん。たまに授業中に質問されたりするけど，びっくりする。そりゃテストは１ケタしかとれへんわなって思った。（少し間をおいて）けどあいつらみてると「俺はまだましやな」って安心してる⑫自分もいる。

下線部⑫からもわかるように，塾に通わない子どもたちであっても，標準学力層は，学力未定着層を「あいつら」という言葉を用いて明確に区別していることがわかる。これは標準学力層が学力未定着層より学力や学習意欲がわずかながら高いため，同じ非通塾の状態であっても，「おれたち」と「やつら」といった峻別がみられると考えられる。また，下線部⑩や⑪より，標準学力層は学力未定着層を「勉強しないといけない限界」とみなしていることがわかる。学力未定着層の子どもは定期テストでも１ケタであることが普通であり，学習意欲は皆無に等しく，ほとんど学習内容が定着していない，『「学び」から逃走した』(3) 子どもたちである。彼らをみて，標準学力層は「まだ俺たちはテストで１ケタとるほどアホじゃないから大丈夫だ」「テストで１ケタとってしまうくらいアホになったら勉強しよう」といった目で，学力未定着層をとらえている。そこには，同じ塾に通わない仲間という意識をみつけることは非常に難しく，学力の違いによって，「おれたち」と「あいつら」という境界が子どもたちのなかにできてしまっているのである。

それでは，学力の視点でみたときに，もっとも下位にあたる学力未定着層は，自分たちと同じ非通塾者である標準学力層をどのようにみているのだろうか。

Q：あなたは標準学力層の子どもたちをどう思いますか。

K：あいつらめっちゃ勉強できるやん。おれらと違ってテストで２ケタ取れてるし。おれ絶対無理やし。おれらとは頭のつくりがちゃう⑬から，ええなあ，って思うで。俺ももっと勉強できたらええんやけどなあ。でもおれらアホやから，無理やなあ⑭。

L：そりゃ，あいつらはええよ。塾いかんでもそれなりの点とれてるしな。けど，べつにああなりたいとも思わへん⑮。今のまんまでもええかってこの頃はあきらめ入ってる⑯な。

M：別に勉強できるんだけが全部やないやん。うちはなんかそんなんよりもっとちゃうことがしたいねん。なんであんなしんどいことばっかりやらなあかんねん，って思ったらどうでもよくなった⑰

やはり学力未定着層であっても，標準学力層は「あいつら」であり，「おれたち」とは違うといった意見が多く聞かれた。とくに，下線部⑬のように，学力未定着層が標準学力層を「頭のつくりが違う」というのは，通塾生でも偽装エリート層が進学エリート層との違いを言うときにも使われており，学力の高低差を合理化するときに使われる向きが強い。しかし，下線部⑮のように，学力未定着層は標準学力層のようになりたいとは思っていない子どもが少なくない。その理由としては，下線部⑭や⑯，⑰のような「どうせ自分には無理や」，「おれたちにはできへんねん」，「そんなことどうでもいい」といった，「世捨て人」のような自己否定的な価値意識がみられることがわかった。バーバラ・エーレンライク（2001）は，アメリカの低賃金労働者が薬物検査，絶え間ない監視，上司からの叱責といった屈辱の数々から，「上司から，またさまざまなルールによって，階層の序列のなかで低い位置にいることをつねに意識させられれば，不幸な現状を甘んじて受け入れるようになる」仕組みを指摘し，低賃金労働者がなぜ日常生活も営めない現状を受け入れ，賃金闘争などのストライキを起こさないのかを明らかにした[(4)]。学力未定着層の子どもが感じている「自分たちには何もできない」といった自己肯定観の低さは，低賃金労働者が現状を甘んじて受け入れるプロセスに似た部分が多い。教師からの叱責，親からの失望，同級生からの排除など，学力の低い位置にいることをつねに意識させられる。したがって，学力未定着層の子どもたちは自己否定的な価値意識をもち，現状を甘んじて受け入れるようになる。

結果として，学力未定着層の子どもたちは「おれたちなんて，しょせんがんばってもどうしようもない」といった意識をもつようになるのである。

Ⅲ．子どものメンタリティに注目した社会的排除の構造

ここで，インタビュー調査の結果から明らかになったことをまとめてみたい。

学力という視点で子どもたちをみたとき，学力上位にある子どもたちの多くは塾に通ってお

り，逆に，学力下位にいる子どもたちには通塾者が少ない。そして，塾に通っている子どもたちのなかにはさらなる二極化現象がおこっており，学力や学習意識に大きな差がみられること，「偽装エリート層」と呼ばれる子どもたちは塾に通っていない子どもたちと区別されたい，という意識が長期間彼らを塾にとどめていることが明らかになった。さらに本稿では塾に通っている子ども，塾に通っていない子ども双方にインタビュー調査を実施し，学力上位・下位のなかにそれぞれある二極化構造は，子どもたちのメンタリティにどのような影響を与えているのかを調査した（図３参照）。

そこから得られた知見の１つめは，塾に通っている子どもも，塾に通っていない子どものなかにも二極化が進んでおり，子どもたちは自分たちと同等の学力を有している集団を「おれたち（we）」，そうではない集団を「やつら（they）」と呼んでいることである。たとえ，「塾に通っている」という点で同じカテゴリーに入っていても，進学エリートと偽装エリートはお互いに「あいつらとは違う」，「一緒にされたくない」といった見方をしており，それは塾に通っていない標準学力層と学力未定着層にも同様の傾向がみられることが明らかとなった。

つまり，自分たちの帰属する集団のなかで「やつら（they）」という排除対象を作り出し，彼らと自分たちを切り離す意識がどの層のなかにも存在するのである。こうした二極化の影響はさらに子どもたちの意識にも変化をもたらしているのである。

２つめは，学力の最下層である学力未定着層には「どうせおれなんか」，「私がなにかしたって何かが変わるわけじゃない」といった自己否定的な価値意識が多くみられたことである。彼らは学校や家庭，社会でつねに「お前は学校（社会）の一番下にいるんだ」というメッセージを受け続けている。このメッセージを受け続けた学力未定着層は「おれたちは無力な存在なんだ」といった世捨て人のような自己否定観をもつようになる。それは，現在のアメリカ社会で問題になっている「働く貧困層（working poor）」が低賃金労働に甘んじるプロセスと共通点が多く，これからの教育問題を考えるうえで，こうしたメンタリティをもつ若者たちの処遇が問題視されてくるであろうと考えられる。

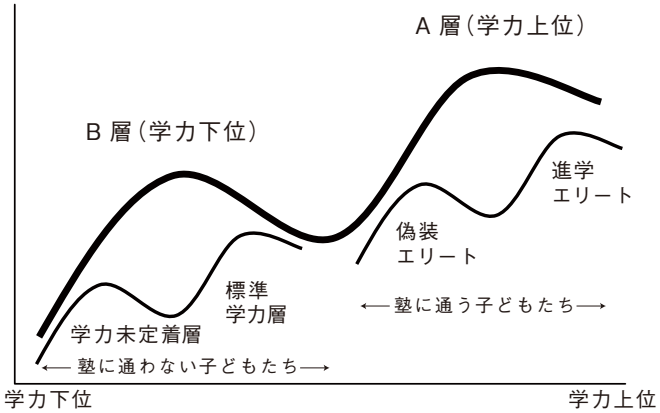

図３　インタビュー対象者モデル

Ⅳ．「ユースフォビア」にみられる排除の構造と教育改革との共通点

これまでは，学力という視点から子どもたちをみたときに，彼らがどのように自分の帰属集団を規定するのか，同時に，自分の帰属集団にあてはまらない子どもを排除するのか，その仕組みを分析してみた。それは，現代の教育改革における子どもや若者のとらえ方と，どのような共通点・相違点があるのだろうか。

かつて現代の教育改革の契機ともなった教育改革国民会議では，いじめや不登校，学級崩壊などの教育問題の原因を，現行の教育の失敗によって生み出されてしまった「悪しき子どもたち」をどのように「矯正」するのか，といった点が話し合われた。ここで論じられる「悪しき子どもたち」とは，本研究の学力最下層である学力未定着層であることは容易に察することができる。今までの教育になじまない，学習意欲をもたない，何を考えているのかわからない，世捨て人のような価値観にとらわれた子どもたちに対して，国民会議で出された結論は「強制ボランティア」を通じて，「限りなくできない無才，非才には」国や会社の理不尽な要求を黙って受け入れる「実直な精神」を育てることであった。その背景には，大人たちのなかに「ユースフォビア」ともいうべき「若者や子どもに対する嫌悪と恐怖の入り混じった感情」が醸成され，そのまなざしが若者たちに対して向けられたためであるという指摘がなされることがある。確かに「今どきの若いモンは・・・」や「あいつは駄目なヤツだ」といった類のネガティブなまなざしが当事者に向けられることによって問題行動が助長されたり，学習意欲の形成に悪影響を与えるという知見はこれまでの先行研究でも明らかである[(5)]。しかし，小谷敏は，あるフィンランド人記者が原宿の若者を取材し，奇妙な衣装をまとった若者が，外見に反して「知的で誠実な対応をみせた」事例を紹介し，欧米に多数存在する「街には昼中からアルコールやドラッグに浸り，荒れ狂っては暴力を振るう『デスペレートな若者』」が日本にはほとんど存在しないことを明らかにしている[(6)]。なぜ，大人たちがこれほどまでに若者に対して嫌悪と恐怖を抱くのか，小谷は脱工業化社会の時代にふさわしいライフスタイルや価値観を築きえず，すべてを犠牲にして経済の成功に人生を捧げた日本の大人たちは決定的な挫折の真っ只中にあり，大人たちの「巨大な不安と挫折感」が子どもや若者に対する視線を厳しいものにしたことを指摘している。「ユースフォビア」にかられた大人たちは，何を考えているのかわからない子どもたちに対して「このまま彼らを放っておくと，何かとんでもないことをするかもしれない」，「きっとあいつらは何か犯罪をおかすに決まっている」といった憎悪の視線を送っているのである。大人たちは学力最下層の子どもたちに向けている視線は，まさにアメリカの低賃金労働者に対する企業や上司のそれと酷似している。しかし，本研究でインタビューをおこなった子どもたちには，学力最下層である学力未定着層の子どもに対して，「あいつらはろくでもないやつらだ」といった意見はほとんど聞かれなかったのである。確かに，子どもたちは自分よりも学力上位，もしくは学力下位にいる者を排除の論理で「おれたち

（we）」の範疇からは除外するが，彼らに対して，「あいつらは将来ろくなことをしないから，何か手を打たないとダメだ」といった学力未定着層に対する憎悪にも似た偏見はなかった。

ここから，子どもたちの排除の論理には，ただ「おれたち（we）」と「やつら（they）」の峻別に終わるだけであり，「ユースフォビア」にかられた大人たちの「勉強しないあいつらはきっと犯罪を起こすに決まっているから，勉強させないと危険だ」といった類の憎悪の対象にはなっていないのである。現行の教育改革は，「働く貧困層」を生み出すメカニズムと同じ流れでおこなわれていると言ってしまうのは暴論だろうか。国民会議の焦点だった「無才や非才に対する実直な精神の注入」は，子どものうちから国や企業の言いなりになるしかない若者を育てることに他ならない。これが，新自由主義にみられる教育の市場化と一体となったとき，子どもたちのなかにはますますメンタリティの差異が生まれ易くなり，そうしたなかから，「ユースフォビア」にかられた大人たちの価値観をそのまま受け継いだ子どもが出てくるとも限らない。「もつもの」と「もたざるもの」との乖離が進めば，子どものメンタリティをより一層変化させる土壌となってしまうだろう。

近年の格差の問題は私たちの日常生活にも大きな影を落としている。アメリカで社会問題となり始めている「働く貧困層」の問題を，日本の子どもたちに対する大人の目線にも感じるのである。

〔注〕

（１）Paul Willis, *Learning to Labor: How Working Class Kids Gets Working Class Jobs*, Gower Publishing Co, London, 1977（熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども：学校への反抗，労働への順応』筑摩書房，1985）

（２）原清治・山崎瞳「学力問題からみた塾とその機能に関する実証的研究」『佛教大学教育学部学会紀要第５号』，2006，pp.7 ～ 18

（３）佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』，岩波ブックレット，2000

（４）Barbara Ehrenreich, *Nickel and Dimed*, Creative Management Inc,2001（曽田和子訳『ニッケル・アンド・ダイムド』，東洋経済新報社，2006，p.278）

（５）本田由紀・内藤朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな！』光文社，2006，pp.114 ～ 128

（６）小谷敏『子ども論を読む』世界思想社，2003，pp.230 ～ 231

〔参考文献〕

苅谷剛彦・志水宏吉・清水睦美・諸田裕子『調査報告「学力低下」の実態』岩波ブックレット　2002
橋本健二『階級・ジェンダー・再生産』東信堂　2003
市川伸一『学力低下論争』ちくま新書　2002
苅谷剛彦・志水宏吉『学力の社会学』岩波書店　2004
橘木俊詔編著『封印される不平等』東洋経済新報社　2004
苅谷剛彦『教育改革の幻想』ちくま新書　2002
佐藤俊樹『不平等社会日本』中公新書　2000

山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房　2004
山内乾史・原清治『学力論争とはなんだったのか』ミネルヴァ書房　2005
小宮山博仁『塾』岩波書店　2000
苅谷剛彦・菅山真次・石田浩『学校・職安と労働市場―戦後新規学卒市場の制度化過程―』東京大学出版会　2000
Stuart Tannock, *Youth at Work: The Unionized Fast-food and Grocery Workplace*, Temple University Press, Philadelphia, 2001（大石徹訳『使い捨てられる若者たち』岩波書店　2006）
Barbara　Ehrenreich, *Nickel and Dimed*, Creative Management Inc,2001（曽田和子訳『ニッケル・アンド・ダイムド』東洋経済新報社　2006）
『月刊高校教育2005年６月号　特集　フリーター・ニート問題と高校生』学事出版
（社）部落解放・人権研究所編『排除される若者たち―フリーターと若者たち―』解放出版社　2005
本田由紀・内藤朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな！』光文社　2006
小杉礼子『自由の代償フリーター―現代若者の就業意識と行動―』労働政策研究研修機構　2002
小杉礼子『フリーターという生き方』勁草書房　2003
小杉礼子・堀有喜衣編『キャリア教育と就業支援―フリーター・ニート対策の国　際比較―』勁草書房　2006
宮本みち子『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社　2002

〔付記〕
本稿は平成18年度佛教大学特別研究費を受けて行った研究成果の一部である。

（はら　きよはる　教育学科）
2006年10月19日受理